

詩時評

第22回

詩人にとって表現 するとは黙する事だ

松本衆司

小林秀雄の『私の人生観』より、次の箇所を引く。芭蕉は、詩人にとって表現するとは黙する事だ、というパラドックスを体得した最大詩人である。(略) 文学者の心が、時代の進むにつれて、どんなに知的になろうとも、言葉には知的記号以上の性質があるという文学の発生とともに古い信仰の上に、今日も文学というものが支えられている事に間違いない。言霊を信じた万葉の歌人は、言絶えてかくおもしろき、と歌ったが、外のものにせよ内のものにせよ、言絶えた実在の知覚がなければ、文学というものもありませんまい。この小林の文を、次の谷川俊太郎の言葉とともにかみ締めた。

谷川俊太郎・田原・山田兼士『詩活の死

活』(澤標)を読む。二〇〇五から十六年までの鼎談や書簡インタビューを収めたもの。田原の問いかけに答えた谷川の言葉より。

情報、饒舌が氾濫しているこの時代の騒がしさに拮抗する、静かで微妙で洗練された力とも言えますか。言語を離れてさえ存在可能な広義のポエジーの源は、いつの時代にも沈黙にあると思います。禪における「無」の境地に喩えることもできるかもしれませんが、沈黙は宇宙のものです。その沈黙のうちには、限らないエネルギーがひそんでいます。

帯に「祝米寿」とある。

批評でもなく、個人的な感想を述べることは恐縮なことだが、長きに亘って詩を書き続けてこられた谷川さんを、私も寿ぎたい。私が詩を書き始めた一九七〇年代初頭の頃、彼の『二十億光年の孤独』や『旅』の「鳥羽」の詩に感銘を受けた。以後、彼の文学の跡を歩きながら同時代に生きられたことを、大きく喜びとしたい。

高良勉詩集『群島から』(思潮社)を読む。
「山羊料理店」を引く。

ヒューマニズムを語るには／山羊料理店が

ふさわしい／火酒の泡盛を飲みながら／山羊肉の刺身を生姜酢醬油で食べ／チーイリチャー(血野菜炒め)を味わい／人の生きる道について考察する／今日も隣のテーブルには／土建会社の一団がいて／青い作業着の社長が／若い職人たちに／人の生きる道を／力強く／説いている／やっぱし人間というものはだ／家族のために一生懸命／働くのが大切だよ／どんなに苦しくても／自分から進んで／難儀な仕事を引き受け／やっぱし皆から信用されるのが／人間の道というものではないか／ヤラーヤ(そうだろう)／若い職人たちは／黙つてうなずき 泡盛をなめ／ヒージャー汁(山羊汁)をすすり／山羊刺身をつまむ／社長に愛人がいるらしいと知りながら／寒風吹きすさぶ表の往来で／がなりたてている／選挙運動の宣伝カー／近ごろの高校や大学では／めつたに教えなくなった／人間とは 人生とは／ヒューマニズムとは／場末のヒージャーヤ(山羊料理店)で／熱く議論されている

琉球弧を「ヤポネシアのしっぽ」と名づけたのはどなたの著作だっただろうか。その愛すべき琉球弧の島々が、愚かな人間の所業という歴史の波に幾度も飲み込まれてきた。高良勉の詩は、その痛々しい歴史と現実を見つ

めながら、「この群島では／『マブイ（靈魂）は永遠に不滅』と信じられている」と語る。この詩集には心豊かに生きる人間たちの生命の味わいがある。

佐藤モニカ詩集『一本の樹木のように』（新星出版）を読む。やはり琉球弧の、いきいきとした南の国を感じさせる装丁の詩集である。「麦の風」を引く。

一度だけ祖父の麦畑を訪ねたことがありますが／風にたなびく黄金の麦の間を／母が娘のように／駆けぬけてゆきました／その時、右手に握っていた麦の穂のいっぼんを／それは指揮者のタクトのようにかがやかし／わたしの目には映ったものです／母は大切に持ち帰り／リビングの棚の上に飾りました／シルバーの器に、花のように生けられた／そのいっぼんの周りでは／今もなお／ブラジルの大地の風が漂っているのです

童話を読むような、絵本を見るような、そんな柔らかなことばの運びによって描かれているのは、一本の木であり、一人の人であり、そして、いっぼんの麦なのだ。決して疎かにできない尊いのちの営みへの思いが、素直に綴られたやさしい詩集である。

山村由紀詩集『呼』（人間社・草原詩社）を読む。「ハーモニカ」を引く。

さきこさんはわたしは小学校三年生の時中学一年生で、木造共同アパートの一階に住んでいた。さきこさんのお母さんはほんとうのお母さんではない。そんなことはアパートの壁の染みでも知っていることだった。一度、たった一度だけ、ほんとうのお母さんが来たことがある。大きな羽根のついた帽子をかぶってふくよかに微笑み、高島屋の薔薇の包装紙にくるまれたお菓子をアパートのみんなに配った。化粧つきのいっぼんつめ髪のもうひとりのお母さんと全然違っていた。さきこさんはどちらのお母さんの前でも同じ態度だった。ふたつを「お母さん」と呼びお行儀よくしていた。「うん、ええよ」という返事にもよそよそが含まれていた。／さきこさんの小袋にはいつも古いハーモニカが入っている。夕方原っぱでふたりきりになると、大切そうに袋から出して見せてくれた。紅いちぎるをソンの穴に当てて吹く。なめらかに移動させてラ、の穴を吸う。ときどきふたつの穴を同時に吹いて音がまざった。そのまざった音と音の重なるところにさきこさんはいるのだ。速く吹いたり遅く吹いたり、さきこさ

んの顔はそのたびに変わっていった。わたしはそれを呆けたように見つめた。振り返って原っぱを見た。まっくらだった。

物語のシーンを見るように読んだ。ハーモニカ吹く少女に心を寄せる。詩人が描こうとしたのは「歪み」だと想った。「夜は急にやってきて、わたしたちを原っぱから追い出した。歩きながら振り返って原っぱを見た。まっくらだった」、現実の「歪み」の闇は深い。山村由紀の詩作のテーマだ。

重光はるみ詩集『叫び』（土曜美術社出版販売）を読む。「牛窓」を引く。

初夏になると無性にオリーブの丘に行きたくなる／私のふるさととは岡山県南の牛窓／半島と島々で成っている／生家は半島の北側／南側は昔から海路の要の町として栄えていた／丘の南斜面にはオリーブ園が広がって／／今日はええ天気じゃなあ／オリーブ園へでも行ってみるか／／子供のころ／さわやかに晴れた日曜日に父が声を掛けると／母も私もすぐ賛成して／よく一緒にこのオリーブの丘に登った／／風いだ瀬戸の内海はきらめき／その向こうの島々は／霞の中はぼうつと浮かんでいる／／丘の上からのんびり海を見ていると／心がほ

ぐれていく／この景色は日本一じゃな
あ／よそへあまり行ったこともないのに／
母は満足げに言った／青い空には刷毛で
掃いたようなすじ雲／時折涼しい風がさあ
つと通って行く／オリブの木には白っぽ
い緑の粒粒の花が咲いて／小さな実も生っ
ている／母は／「しろろがーね色のー
葉にそーよぐー」と「オリブの花咲くこ
ろ」を歌い出した／私も声を合わせて歌っ
た／そのころのオリブ園は赤屋根の家が
一つあるくらいで／観光客はほとんどい
なかったのだ／それから私達は てっぺん
の草はらに腰を下ろして／いつまでも海を
見ていた／今もこの日のことがよみがえ
ると／私は満ち足りた気分になる

詩集の詩篇を順に読み味わい、巻頭のこの
詩に戻る。この詩が、人生のそれぞれの場面
に寄り添う詩人の心とそこから紡ぎ出される
情景描写の原点のようだ。最後の二行の是非
が問われるところだが、なんとも慈しみ深い
多島海の風景だ。

詩誌の紹介は別の欄に譲ったが、それでも
一言述べておきたいと思うものもある。ご容
赦を請う。

日本詩人クラブ発行の『詩界』二六八号の
特集「困難な時代の詩」には麻生直子・江口

節・下地ヒロユキ・浜江順子・倉持三郎・金
田久璋・清水恵子・丹羽京子・佐川亜紀・塚
本敏雄・佐藤伸宏が、それぞれユニークなそ
して力のこもったエッセイや論を寄せている
その中から江口節の文章に触れる。ご自身の
「困難」と直面された人生を背景に、江口節
はそのエッセイ「困難な時に詩を書くとい
うこと」のなかで二篇の詩を紹介している。一
篇は『詩集・阪神淡路大震災』の第二集に収
められた杉山平一の「町」。

歪んだり／潰れたり／ぐちゃぐちゃになっ
たり／これは水に映った町／ではないのか
／／風よ 吹くな／人よ、石を投げるな／
／水面が端正にしずまるまで

人生のさまざまな困難を背負いながら生き
てきた杉山平一のこの詩を江口は「簡潔な詩
行から被災者に寄せる温かな祈りがにじみ出
る」と書く。見事な詩に寄せる巧みな批評で
ある。もう一篇は二〇〇九年のご子息の急死
というこれ以上ない悲しみの現実の渦中に綴
った「ごはんよ」というご自身の詩。

持つていくとき／つい声に出してしまっか
ら／すくと落ちる／君が振り向く位置／
返事をする日々の 真ん中に／／小さなご
飯を差し出すたびに／／何度も何度も／告げ

られる／はじめてのように

親族の死による会社経営の再建と億円の
負債を抱え、その解決へ奔走し疲弊する最中
の出来事だったという。「二〇一〇年は、十
九年ぶりに重荷がとれ、ひたすら次男の詩を
書いていた。詩は書くが、家の中で次男の話
はしない。できなかつた。夫もできない。六
寸仏をいくつも彫っていた。寡黙な日々が続
く。」

もどかしくせつないが、詩は向こうとこち
らを結ぶ心の通路でもある。

高木敏克詩集『発光樹林帯』（濠標）を読む。
「湾をめぐる」の一部を引く。

どこかで携帯の着信音が鳴りはじめて、ホ
ンマニアタタチアホチャウノと聞こえた。
この明るすぎる海辺の乱反射の光と音が錯
乱の原因だ。過剰な記憶が物語の反乱をも
たらすのだ。わたしは寝ても醒めても過剰
な物語と固有名詞にうなされつづける老人
である。働きすぎが病気の原因で、なにし
る大都会の大企業に勤めたわたしは勝たな
ければならない。大きく複雑なものが小さ
く単純なものに必ず勝つというのがわれわ
れのセオリーなのだから。：（略）：陽が
落ちると山は闇を孕み平野にも海の中にも

わたしは溺れはじめる。「わたしの中にも闇があるから溺れて」と巨大なシステムがいうからわたしの闇もはみ出して湾岸を這いはじめる。わたしの生みの親はやはりこの闇であり母胎回帰の祈りがこの湾をめぐる通勤なんですと応えようとしたら巨大システムが支配する会社の着信音がまた車内に響き渡った。ホンマニアタタチアホチャウノ。これは人間をあざけ続ける巨大システムの本音の言葉なのだ。／わたしの目覚める方向はテレビのある明るい都会の日常でない。あの帰るべき六甲山の古代人の呼び方はもしかしたら「向こう闇」かもしれぬ。…(略)…

この詩集のどこを切り取っても、右の箇所に通じるような世界観が滲み出てくる。五十年を跨いで詩人がいくつもの長大な散文詩によって描き出そうとしたものは、人間の生の本質についての洞察の記録を一瞬の眩暈の世界として幻想化したのではないか。そのような興味を抱かせる詩篇群だ。

愛敬浩「詩集『メイ・ティはそれを好まない』(土曜美術社出版販売)を読む。「その手にのるな」を引く。

ブレヒトは／「その手にのるな」と言っ

たものだ／新しくやって来た学校長が／や
つて来て早々に／教職員組合の委員長(二
代目)である彼を／校長室に呼んだ／丁重
な挨拶をした彼に／「大学の時、君の所属
していたゼミの先生は誰かね」と、新しく
やって来た学校長は言ったものだ／彼は親
愛の思いで、ここにこして答えた／その、
新しくやって来た学校長は元・大学教授で
／東京にあった大学がツクバへ移転した時
の「賛成派」で／その、移転先の大学を退
官したばかり／片や、移転「反対派」の先
生は／東京の、二流以下の私立大学へ移り
／その、「二流以下の私立大学」の卒業生が、
彼だった／のんきな彼は、単純な昔話かと
思っていたら／要するに／彼に圧力をかけ
たわけだった／まるで「お前の先生に言い
つけてやるぞ」という風に／悪意ある言葉
が、幾つか続いた／彼は黙って、その場を
去った／「関係の絶対性」／後に、吉本隆
明は「関係の客観性」と言い換えるが／そ
れは「絶対性」でいいじゃないか／もう名
前も忘れ果てた、何某という、その学校長
も／もはや、その顔すら浮かぶこともない
が／彼に、内容証明郵便で文書を送り付け
て来た理事長も／共に、もう死んでいるだ
ろうが／ブレヒトが言った「その手にのる
な！」という言葉の先で／まだ、生きてい
るように見える

新作を旧作で裏打ちする試みの詩集である。
その旧作「言葉」(詩集「回避するために」
から)を引く。

発言の角度がわからない／言葉は意味を失
つて枯れる／しかたなく偽りの足を組み／
頬笑みにみえるように顔をしかめる／／に
こやかに組み込まれる／発言は権利である
／反論は義務である／なんと あなたも私
もいかにも陽気だ／／どんな負い目も抱く
な／有効である必要はない／言葉がけむれ
ば／位相も発火する／／ガタガタもしふ
にやふにやもする／／ロンリーな論理／輪廻
する倫理／言葉を囁むな 言葉を喰らえ

この詩から四十年近い歳月を経た。「彼」
らの闘いはどうなったか。かつて「二流以下
の」と言われたような数々のつまらない価値
観の「絶対性」はどうなったか。理事長や学
校長の権威や権力はどうなったか。「その
手にのるな！」という言葉の先で／まだ、生
きているように見える」という行に、「私も
自らの(転換の書)を書いたつもりなのであ
る」とした詩人の意図を思わずにいられない。

詩集評担当の松本衆司の住所

583-0882 大阪府羽曳野市高鷲3-3-1-814